

2022年4月17日～4月23日 各家庭でのディボーション用テキスト

その時彼は喜んだ。それは次のような理由によるのである。

第一、だれか神を恐れる者が自分と同じようにこの谷にいるということをそれから推測したこと。

第二、この暗い陰惨な状態においても、神が彼らと共におられると悟ったこと。

【ヨブ 9:10】 またここに出る邪魔物のために自分には見えないとはいえ、どうして自分にも共におられないはずがあるかと考えたのであった。

第三、(もし彼らに追いつくことができれば) やがて仲間ができるであろうと思ったこと。こうして彼は進んで行き、前方にいる人に呼びかけたが、その人は何と答えてよいか分からなかった。彼もまた自分が一人だと考えていたからである。やがて夜が明けた。その時基督者は言った、「神は死の陰を朝に変えられる」。【アモ 5:8】

さて朝となったので、彼はふり返って見た。それは帰りたと思ったからではなく、暗闇の中で自分がどんな危険を冒してきたかを、日の光で見たかったからである。こうして彼は一方にあるみぞと、他方にある沼とが一層はっきりと分かった。またその二つの間にある道がいかに狭いかも分かった。今また地獄の妖怪やサテュロス(半獣神)や火龍も見えたが、皆遠く離れていた。夜が明けてからは、彼らは近よれないのである。それでも「暗やみの中から隠れた事どもをあらわし、暗黒を光に引き出す」【ヨブ 12:22】と書いてある言葉どおりにそれらは彼に現われたのであった。

さて、基督者は淋しい道のあらゆる危険より自分が救い出されたことにいたく感動した。その危険は以前にはもっと恐ろしく思ったものであるが、今や日の光がそれをあきらかにしたので一層はっきりと見た。またこのころには太陽が昇って来たので、これもまた基督者にとっては一つの恵みであった。それは読者もたぶんお気づきのように、死の陰の谷は初めの部分も危険であったが、彼がこれから行こうとする次の部分はむしろさらに危険であった。というのは、彼が今立っている所からちょうど谷の端まで、道の到る所に、ここにはわなやおどしやおとし穴やかけ網などが一杯しかけてあるかと思うと、またかしこには穴やおとし穴や深い穴やだらだら坂が一杯設けてあったので、彼がこの道の初めの部分を通ったときのようにここが暗かったなら、たとえ彼が千の命を持っていたところで、それらが破滅しても当然であったろう。が今しがた言ったように、太陽が昇るところであった。彼は言った、彼のともしびがわたしの頭の上に輝き、彼の光によってわたしは暗やみを歩む。【ヨブ 29:3】

それ故、彼はこの光の中を谷の端まで来た。今や私が夢で見ていると、この谷の端に血と骨と灰と切りさいなまれた人体とが横たわっていた。以前この道を行った巡礼者たちなのであった。そこには昔法王と異教徒という二人の巨人が住んでいたが、その権力と暴虐によって残酷にも殺された人々の骨や血や灰などがそこに横たわっていたのである。しかしここを基督者は大した危険もなく通り過ぎたので、それには私も少し驚いた。その後知ったことであるが、異教徒は死んで幾日にもなりし、他の一人はというと、まだ生きてはいるが、老齢のため、また若いころに受けた多くの激しい衝突のため、身体が弱り関節が硬くなったので、今はただ洞穴の入口に坐って、通りがかりの巡礼者たちに向かって歯をむき爪を噛んでいるだけであった。彼らを襲うことができないためである。



基督者はつづがなく巨人教皇を通り過ぎる

こうして私が見ていると、基督者は自分の道を進んで行ったが、洞穴の入口に坐っている老人を見ると何と考えてよいか分からなかった。ことに、基督者に向かって、もっと沢山焼かれるまではお前たちは良くはなるまいと言ったからである。もっとも彼は追いかけてくることはできなかった。しかし基督者は沈黙を守って平然としていたので、通り過ぎても何の害も受けなかった。

その時基督者は歌った。

おお、数知れぬ不可思議よ（かく言うほかはない）、  
ここで会った患難の中で守られたとは。  
ああ、ほむべきかな、わたしを救い出されたかのみ手。  
暗黒の危険、悪魔、地獄、さては罪まで  
この谷にいる間わたしをとり囲み、  
わなと穴、おとしと網が、わたしの行く手に横たわった、  
価値なき愚かなわたしを捕え、からめ、倒すために。  
しかしわたしは生きている。  
栄冠イエスにあれ。

さて、基督者が進んで行くと小高い所に来た。それは巡礼者たちが行く手を眺めるためにわざわざ築かれたものである。そこで基督者は登って行って前方を見ると、信仰者が前を旅して行くのが見えた。

【ジョン・バニヤン 天路歷程 正篇 より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい